
俺の彼女は駆逐艦

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の彼女は駆逐艦

【Zコード】

N3967D

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

新米海軍少尉長野は、昭和18年哨戒艇102号への乗艦命令を受ける。赴任先のスラバヤで待っていたのは、捕獲改造艦の哨戒艇と、そこに宿る少女だった。

哨戒艇102号（前書き）

ええと、この話は艦魂ものです。黒鉄大和先生に触発されて書いて書きました。ただ他の作品との兼ね合いがあるので、更新は月1・2回となります。

哨戒艇102号

江田島にある海軍兵学校を卒業したばかりの新米少尉、長野満がその艦に乗り込む事になったのは昭和18年6月のことであった。

彼は卒業後しばらく内地で地上勤務を行つてたが、激化する連合国との戦争と、それに伴う人員の損耗は新米士官でも遊ばせる余裕はなかつた。

2月のガダルカナル島撤退や、4月の山本五十六連合艦隊司令長官の戦死と言う様に、戦局はますます厳しくなり、まもなく学徒動員も行われようとしている時期だつた。そして彼にも、前線に出るよう辞令が下つた。

「6月18日付を持つて哨戒艇102号乗り組みを命ず。」

辞令に書かれていたその艦名を見て、彼は首を捻つた。

「102号……ずいぶん番号が大きいな。」

彼の知る限り、哨戒艇の番号は38号等のよう二ヶタ台の艇ばかりであった。それなのに、いきなり100以上の番号に飛んでいる。

仲間や上官に聞いても、そんな船知らないという答えしか返つてこなかつた。彼の心の中に、段々と乗る艇に対する不安が高まつていつた。もちろん、不安だから乗れませんなどというのは、厳格な縦社会の軍の中で通用するはずがない。

不安はあったが、軍人として命令には従わなければいけない。

命令書によると、その艇は今、日本が占領している旧蘭領東インドのスラバヤにいるとのこと。艇はスラバヤを拠点に活動する予定なので、彼は現地に赴いて着任することとなつた。そのため、彼は直ちにスラバヤに向かつた。

時間が無いので、船ではなく飛行機での移動となつた。急な駆け込みではあつたが、なんとか岩国 の飛行場から南方へ向かう輸送機を捕まえて出発した。ただし直通便はなく、最初は那覇までである。そこから次は台湾へ。さらにフィリピンとその後数回飛行機を乗り継ぎ、彼がスラバヤについたのは、配属ギリギリの6月18日だつた。

現地に到着するやいなや、彼は車を拾い飛行場から急いで軍港へ向かつた。

スラバヤ軍港に着くと、彼は早速乗艦する哨戒艇へと向かつ。

この時期、主戦場は遙かかなたの南太平洋と北太平洋であった。そのため、スラバヤ港に大型艦艇の姿は無い。つい2年前まで、オランダ艦隊の巡洋艦や駆逐艦が停泊していた港には、今は旭日旗をはためかせた日本海軍の小艦艇ばかりが停泊している。そのせいで、どれがお目当ての哨戒艇102号か全くわからない。

「参つたな。」

仕方がないので、彼は近くにいた兵を捕まえて、102号の所在地を聞くことにした。

「すまない。哨戒艇102号ほどの船かな？」

すると、兵士は指差した。

「102号ですか？あれです。あそこにて泊まつてゐるやつですよ。」

兵士が指差す先に、駆逐艦ほどの大きさの艦が一隻桟橋に停泊していた。

「ありがとう。」

彼は兵に対し礼を言つと、その艦に向かつて歩き始めた。しかし、近づくに連れて、その哨戒艇がおかしな艇であるのに気付いた。

「こいつは一体？」

大きさは駆逐艦ほどあるが、それは別にいい。日本海軍の哨戒艇は通常旧式駆逐艦の流用であるからだ。彼が驚いたのはシルエットである。

艦の概観には、必ずとその建造した国の特徴が出てくる。大層な外觀を持つアメリカの籠マスト。優美な日本のパゴダマスト。要塞のようなドイツ艦などがある。

しかし、目の前の艦は彼が今まで見てきたどの日本艦艇とも違うシルエットであった。大型の1本を含めた3本の煙突、中央部が高くなっている独特の船体のライン。どれをとっても日本艦離れしている。ただ、どこかで見たような気がするのも事実だった。

艇に対する不安がますます増す中、彼は艇に乗り込んだ。乗り込

むと、早速着任の挨拶である。

水兵によつて艦橋に案内され、そこで幹部と対面した。幸い、この時は艦長以下全ての幹部が艦橋に揃つていた。

「申告！帝国海軍少尉長野満。本日付で哨戒艇102号配属となります。よろしくお願ひします。」

すると、少佐の階級章をつけた40代ぐらいの士官が敬礼し返す。

「「苦労！私、福井武夫少佐だ。ようこそ哨戒艇102号に。」

その後、他の幹部達と挨拶が交わす。それが終わると、彼は福井艦長に疑問をぶつけた。

「ところで艦長。この船は一体何者でありますか？哨戒艇102号など聞いたことありませんが。それに、艦影も日本の物でない気がしますが？」

すると、福井少佐は笑いながら答える。

「そりやそりや。この艦はおととい工廠から引き渡されたばかりなのだから。そして、この艦が日本艦らしくなくて当たり前だ。この艦はアメリカ製だ。厳密には元アメリカ海軍駆逐艦「スチュワート」だ。」

その答えに、長野は驚く。

「えー？では捕獲艦なのですか？この艇は？」

「そうだ。元は米アジア艦隊所属の平甲板型駆逐艦でな、去年ジャワ沖海戦で損傷し、ここで修理を受けていたが結局修理が間に合わず、破壊の上放置された。そして我が軍がここスラバヤを占領した際、ドックの中で横倒しになっていた所を捕獲した。で、ついこの間まで修理と改装を行っていたのだ。」

その説明を受けて、今までの疑問が氷解していく気がした。

平甲板型駆逐艦とは、第一次大戦中米国が実に256隻という大量建造をした4本煙突が特徴の駆逐艦である。そのほとんどは竣工してすぐに大戦が終了したために、五大湖でモスボール保存されていた。そのため、建造から30年近く経つた今でも多くの艦が残っている。第二次大戦が始まり、英國に50隻近くを譲渡したにも関わらず、100隻近い数が未だ米国で運用されている。

福井少佐は説明を続けた。

「ただしな、そのまま使つては敵味方から米国艦艇と間違われてしまうのでな、識別の意味を含めて、改装で煙突は第一煙突と第二煙突を結合させている。また、武装もアメリカ時代の物は破壊され使えなくなつていたので、こちらで調達可能な物に切り替えている。「（102号は主砲を竣工時オランダ製の高射砲を、その後日本製の8cm高角砲に積み替えている。）

「まあそう言う艇だ。ふね旧式の分捕り品で悪いが、任務に励んでくれたまえ。確か君の専門は航海術だつたな、なら取り敢えず、君には当分航海士見習いをやってもらおう。」

「は、謹んで命令を拝受します。」

長野は敬礼した。一いつして、着任の挨拶は終了した。

「 イハハラです少尉。」

任務は明日からと云つて、拝島といつ一等兵に案内され彼は士官室へと向かつた。通常兵はハンモック。下士官は3・4人で一部屋であるが、士官は1・2人で一部屋を割り当てられる。

彼は幸運にも一人部屋だつた。部屋に荷物を置き、上着を脱ぐと早速ベッドに横たわる。

「 疲れた。」

飛行機による長旅であったので相当疲れていた。仕事は明日からで良いと言われたので、とりあえず今日はしっかり休んでおこうと思つていた。

彼はそのまま眠りに就いた。

「 少尉。長野少尉。」

誰かに声を掛けられていた。目を開けると、先ほど自分を部屋まで案内してくれた拝島一等兵の顔があつた。

「 夕食の時間ですよ。」

「 ああ、すまない。すぐに行く。」

急いで上着を着て、部屋の外へと出る。

扉を開け、彼は廊下へと出たが、そこで彼の目に信じられない物が飛び込んできた。廊下の突き当たりに、金髪でワンピース姿の少女が見えたのだ。

「じーじー」と田をいはすつてみる。それを見て、拝島一等兵が声を掛けってきた。

「少尉、どうしました？」

「いや、セレ……」

正直に言おうとしたが、言ったところで信じもらえないと思つた。帝国海軍の艦艇内に西洋人の少女が乗つてゐるはずが無い。あまりに馬鹿げている。言つたところで狂人扱いされるのが落ちだ。

「いや、なんでもない。」

結局、この時は幻覚だと自分に言い聞かせた。

そして夕食後、彼は空いた時間を使って艦内旅行を行つていた。艦内旅行とは、軍艦内を見て回る事だ。

駆逐艦は全長が120m程しかない。しかし、その中はさすがにメカだけあって色々とごちゃごちゃしている。慣れないと迷路だ。そして、あいにくと軍艦乗艦経験が殆どない彼は迷子となつた。

「やつちまつた。」

今どこにいるのか全くわからない。

「しょうがない。取り敢えず甲板に出てみるか。」

上へ行くラッタルをひたつていけば絶対に最上甲板に出られる筈である。彼がそう考え、歩き出した時であった。

「私が案内してあげようか？」

その声に、長野の体は硬直した。なぜなら、声が明らかに済んだ高い声だったからだ。すなわち、女の声である。女が海軍の艦艇に乗っているなどあり得ない。

彼は恐る恐る顔を声のしたほうへと向けた。すると、そこには先ほど幻覚と思った少女が笑いながら立っていた。

「私が案内してあげようか?」

満に少女が声を掛ける。満は呆然としながら彼女を見つめていた。
首周りがセーラーのワンピースを着込み、歳は二十歳前後ぐらい、
整った顔立ちに長くサラサラな金髪。満が見る所、充分美女と言え
るだらう。

だが、ここは帝国海軍の艦艇の上である。女性が乗つていればず
がない。しかも、金髪と言つ事は最低でも東洋人ではない。

満の思考はフル回転で田の前の少女が何者であるか考え始めた。

(どう考へても女、しかも西洋人が帝国海軍の船に乗つてゐるはず
はない。けど、俺の目には少女が映つてゐる。どうすると……)

彼はある結論に達した。

「幻覚だな。長い飛行機の旅の疲れが出たんだ。早く部屋に帰つて
寝よう。」

そう言つと、彼はその少女を無視して廊下を歩き始めた。すると、
慌てて少女は彼を追つ。

「ちよ、ちよっと待ちなさいよー! 勝手に私を幻覚にするんじゃない
いわよー。」

しかし、その声に満は耳を傾けない。

「聞こえない。聞こえない。これは幻聴だ。」

「幻聴じゃないって……。」

「聞こえない、聞こえない、聞こえない。」

ひたすら呟く。そして、業を煮やした少女はある手段に打つて出た。

「もう……待ちなさいって言つてるでしょー。」

次の瞬間、満の頭に凄まじい衝撃が走った。

「痛あ…………！」

一瞬、脳天がかち割れるような気がした。

衝撃が残る頭を押さえながら、彼は後ろを振り向いた。その視線の先に入つたのは、先ほどの少女がバットを持って立腹している姿だった。

「人の話ぐらいちゃんと聞きなさいよ……。」

幻覚と思っていたが、この痛みは本物であった。さすがにこれは幻覚ではすまされない。

「つう……この痛みは本物だ。お前は一体何者だ……？　まさか間諜か！？」

間諜とはスパイの事だ。彼にしてみればそれ以外には考えられない。しかし少女は不快そうな表情を変えずに言い返す。

「こんな可愛いスパイがこの艇に進入できるはずないでしょ。」

可愛いかはともかく、確かにスパイがそう簡単に艦艇の中に進入することが出来るのは考えにくい事だ。

「じゃなんだ！？まさか元はアメリカの駆逐艦だからアメリカ人の自縛靈か！？」

すると、その少女は呆れたような表情をして溜息をついた。

「女の自縛靈がなんで駆逐艦に住み着くのよ？」

確かに、アメリカには女の軍人がいるらしいとは聞いているが、その女性たちが前線に出ている話は聞いた事がない。

「じゃあなんなんだ？」

「あなた海軍士官でしょ。艦魂って言葉聞いた事ないの？」

その単語に、満は聞き覚えがあつた。

「艦魂って、船に宿る魂のあれか？」

古来から船員が語り継ぐ話の中に、船には魂が宿るとされているという物がある。それはあらゆる船に存在し、そしてその姿は軍艦や客船は女性、漁船は男性と言われている。

軍艦や密船の呼称を彼女と呼ぶのもこれに由来していると言ひ物もいる。満も兵学校時代にこの話を教官から聞き、様々な軍艦の艦魂がどのような女性化を同級生で話したるものだ。

少女がこのよひな単語を出してきた。そうなれば、答えは直すと決まつてくる。

(まさか?)

「まさかお前がこの哨戒艇102号の艦魂とか言つてじゃないよな?」

そして、少女の答えは案の定と叫びべき物だった。

「ナリナリ。」

(やつぱり。)

と思いながらも、そう簡単に信じられる筈がなかつた。

「そんなこと信じられるかよ。」

満にとって、あくまで艦魂の話は船員たちの間の迷信だと思っていた。この科学が発達している時代にそんな物があつてたまるかと思つていた。

「どう進入したかしらないが、取り敢えず侵入者だろ。」

少女はやれやれといった表情になる。

「あなた結構堅物ね。まあ直ぐにわかるわよ。」

丁度そこへ、一人の下士官が通り掛った。

「おや少尉、何をしているんですか?」

「いや、こいつと話をしていたんだ。」

しかし、その言葉にその下士官はキョトンとした顔をした。

「こいつで、誰もおりませんが。」

「えー?」

「少尉、お疲れなんじやないですか?早く部屋でお休みになつた方が良いですよ。」

そう言つて下士官は言つてしまつた。

「ね、あんた以外には私は見えていないわけよ。」

この様な状況に置かれては、満も信じざる得なかつた。

「じゃあ、お前は本当にこの艇の艦魂。」

「さう。まつやく信じもらえたわね。」

少女は苦笑いしながら言つた。一方の満は、驚きの表情となつた。

「本当に存在していたんだ。」

「そ、部屋に帰りたいんでしょ。案内するわ。」

そして少女は数分で彼を部屋の前まで案内した。途中数人の人間とすれ違つたが、誰一人彼女には気付かなかつた。

「はい。ここよ。」

部屋のプレートを見ると、確かにそこは満の部屋だつた。最初は半信半疑だったが、今や目の前の少女に対しても疑問ばかりが湧いてくる。

「それじゃあまた。」

部屋の前から立ち去りつとした少女の腕を満はつかんだ。

「ちょっと待て……」

「何よー!?」

「聞きたい事がある。部屋に入ってくれないか?」

少女は少し考え込んだ。そして。

「いいわよ。」

艦魂（後書き）

月一回とか言っておきながら、意外と反響があつたので、速いペースで更新することにしました。ほかの小説は遅れますがよろしくお願いします。

運命を変える言葉

部屋に入った二人は、向かい合つて座った。満は椅子に、そして少女はベッドに腰掛けた。

「で、話つて何よ？」

少女が腰掛けるなり満に向つて言つてきた。

「聞きたい事は山ほどあるナビ、じゃあまず聞くナビの名前は何て言つんだ？」

それに、少女は少し難しそうな顔をした。

「そうねえ。私はこの船その物だから、強いて言つなら哨戒艇102号ね。」

「それじゃあ呼びにくいや……」

相手は魂だけとはいえない人間の形をしていて。番号で呼ぶのはまるで監獄の中の囚人みたいで気が引ける。

「けど私には他に名前なんてないわよ。まあ以前はスチュワートで呼ばれていたけどね。」

「だったらスチュワートでいいや。番号で呼ぶよつはマシだ。」

「あなたがそう呼びたいならそれで良いわよ。じゃああなたの名前は？」

「俺の名前は長野満だ。」

「長野満……だったりミチルって呼んでいい?」

下の名前で呼ばれることは、両親以外にはほとんどないことだったが、別に悪いことではないので、満は承諾する。

「ああ、良こよ。」

「わう。」

「じゃあスチュワート。早速だけど、なんで君は俺に見えるんだい?」

先ほど会った下士官には彼女は見えなかつた。しかし何故か満には見える。これが彼には不思議であつた。

「それは簡単に言えば相性ね。」

「相性?」

「そう。詳しい事は私たちにも良くわからないけど、艦魂を見る人間はその艦魂によつて違うの。ミチルは以前、他の船で艦魂を見たことがある。」

満は思い出してみるが、そのような記憶はない。以前乗つっていた練習艦の「浅間」でもそんなことはなかつた。

「いや……ない。」

「そうでしょ。あなたが私を見えるのはただ単に偶然なだけかもしれない。まあ仲間の中には、お互い精神的に似ている人間なら見えるって話をいう人もいるけど。」

「やうか・・・ところで、さつきから私たちとか他の入って言づけど、じゃあスチュワートには他の艦魂が見えるの？」

「当たり前でしょ。私たちはお互い誰でも見えるわよ。」

スチュワートはとも常識のように言った。

「やうか。じゃあ次に、どうして日本語を喋れるの？元はアメリカの駆逐艦なんだろう？」

「うーん。それも私にはわからない。アメリカの駆逐艦時代は普通に英語が理解できたけど、日本軍に拿捕されてからは自然に日本語も理解できたわ。ただし、もしかしたら前世が関係しているかもしれないわね。」

スチュワートは少し表情を暗くした。

(なんだらう？)

それに満も気付いたが、そのことについては聞かないことにした。

「前世？艦魂にも前世つてあるの？」

「それもわからないわね。そういう噂があるだけよ。ただ転生輪廻つて考えが日本にあるでしょ？全くありえないことはないかもね。」

「

満にはそれ以上なんとも言えなかつた。

ちなみに、後々特攻隊の名前として有名になる七生報国といひ言葉があるが、それは七回生まれ変わつて國のために働くという意味だ。

「で他には何か聞きたい事はあるの?」

「そうだな・・・じゃあ聞くけど。失礼かもしけないけど、この船つて竣工して30年近く経つよね?けどスチユワートはどう見ても20行くか行つてないかぐらいだよね?これは一体どうしたことだい?」

女性に對して年齢の話を聞くのはまずい事だが、聞きたい事は全て聞いておこうと思つた。

「確かに失礼ね。けどまあ答えておくわ。何故かね、艦魂は歳をとらないのよ。だから死ぬまでこの姿のままね。」

「死ぬつて言つのはつまり、沈むつてこと?」

「それもあるけど、解体されたりして船としての寿命を終えるときね。」

話を聞いて、満はなんと哀しい人生だらつと思つた。

(誰にも見取られることもなく、死ぬつてことだよな?人じやないとはいえ、あまりにも酷いんじやないかな?)

「せうか・・・じゃあもし」の船が沈むときはスチュワードも・・・

「

「そうね。けど、それが私たちの運命なのよ・・・話は他にあるかしら?」

聞きたい事はある」とはある。しかし、これ以上聞く氣にはなれなかつた。

「いや、もういいよ。あつがとう。」

「やつ・・・じやあまたね。」

そう言つて部屋から出ようとしたスチュワード、満足しつづつた。

「また話が聞きたくなつたら、聞いても良いかな?」

彼女は振り向き返事をした。

「ええ。・・・あのや、私も良かつたらまたここに来ていい。」

これは予想外の言葉だった。殺伐とした船の中で、少女が会いに来てくれるのは嬉しい限りだ。

「ああ。また来いよ。」

「これが、二人の運命を大きく変える」となる一言だった。

運命を変える言葉（後書き）

御意見などをお待ちしております。

哨戒艇101号

満が乗り組んでから一ヶ月ほどの間は出撃はなく、乗員の習熟訓練が行われた。いくら軍艦不足だからといって、全く訓練していない艦を出すほど帝国海軍も愚かではなかった。

航海士である満は艦橋で舵輪を握る操舵手をまかされた。そしてこの日も港外での訓練を終え、桟橋に横付けする所であった。

「ちょい取り舵。」

「ちょい取り舵、よしそうひ。」

艦長の命令に従い、満は慎重に舵輪を回す。既に何回も行っている動作だが、緊張する。そして艦はそのまま無事に接岸できた。

「ふう。」

安堵の息をつく満。そんな彼に艦長の福井少佐が声をかけた。

「大分上手くなつたな、長野少尉。」

「はい、ありがとうございます艦長。」

「次の訓練は3日後だ。それまでゆっくり休むと良い。」

艦は補給と修繕のために、しばらく港に停泊する。

「はい。」

その後全ての課業を終え、夕食を済ませると、彼は自室に向かつた。1ヶ月もすれば艦内での生活には大分慣れる。彼はこの102号哨戒艇を色々な意味で気に入っていた。

まず艦内の余裕のある設計である。もちろん、駆逐艦であるから決して広い事は無い。あくまで日本の駆逐艦に比べてである。

アメリカの軍艦は居住環境に随分と気を使っているらしく、兵にも一応スチール製のベッドが用意されていた。また、便所の数も多かつた。

実際、戦後海上自衛隊に入った元海防艦の乗員が、乗り組んだアメリカ供与のP.F.^{パトロール・フリゲート}の居住性や造りの良さに驚いたという話がある。またその分扱いやすい。

そして、もう一つ満にとつて嬉しいのは、一人の少女の存在だった。

彼がスチュワートと呼ぶその少女は、この哨戒艇102号の艦魂である。乗艦して以来、彼は彼女とよく話す。

今之所彼女の存在が見えているのはこの艦で彼だけである。だから、彼女と二人きりで話せることが、彼にとっては少しばかり嬉しかった。

自室に戻ったが、扉の前に来ても今日はスチュワートの気配はなかつた。

「あれ、今日は来てないのかな?」

夜間の当直や、艦から降りる日を除いて、彼女とはほぼ毎日会っていた。その彼女が今日はいなかつた。

「めずらしいこともあるもんだな。いつも來てたのに。」

首をかしげつつ、彼は部屋の中へと入つた。そして、少女と会えない事をちょっぴり残念に思つたのであつた。

さて、彼が気にするスチュワートはどうしていたかというと、彼女はその時マストの先端に立つていた。その彼女の視線の先には、ある船がいた。

艦魂は艦から離れる事が出来ない。ただし、艦魂同士は話すことが出来る。一種のテレパシーみたいな物だった。

彼女はその船に向かつて話し掛けた。

「お久しぶり、「スレイシャン」」

すると、相手の船も彼女に気付いた。

「あら、あなたは確かアメリカの「スチュワート」じゃない。あなたも今は日本海軍に？」

「スレイシャン」と呼ばれたのは、この日内地からの船団を護衛

してやつてきた、哨戒艇101号であった。

番号を見てわかるよつこ、彼女は海外からの捕獲艦である。元々は英海軍の旧式駆逐艦だ。彼女は開戦直後に香港で日本軍によって捕獲され、その後改装と修理を終え、哨戒艇として竣工した。今は横須賀鎮守府所属である。

その彼女の艦魂は、スチュワートと同じく西洋人の少女だった。歳はスチュワートと同じくらい、整った顔立ちだが髪は金髪ではなく、綺麗なブルネットであった。そして可愛らしい丸い小さな眼鏡をかけていた。

二人は数年前に一度香港で顔を合わせていた。

「ええ。今は哨戒艇102号。」

「そうなの。けど本当に懐かしいわね。あの時はたしかアジア艦隊が訓練で寄港した時よね。「ヒューストン」に「マーブルヘッド」もいたわね。」

スレイシアンが懐かしい名前を上げる。

「ヒューストン」は米アジア艦隊旗艦だった重巡だ。昨年のバタビア沖海戦で日本軍によつて沈められている。

「マーブルヘッド」は「オマハ」級の軽巡で、日本軍の攻撃で損傷し、その後オーストラリアに撤退している。

スチュワートことつこは懐かしい名前ばかりである。そして、その名前を出されると彼女の心中は複雑になる。

「ヒューストン」を沈め、「マーブルヘッド」を傷つけた日本軍に、今は奉公しているのだから。

「戦争が始まって2年だけど、敵も味方も随分沈んだみたいね。・・・けどそれが私たちの運命なのよね。」

スレイシアンの言葉が、彼女たちにとっての現実だった。自分の意志に関係なく戦い、そして艦が沈むとき、その生涯を終える。

「私たちも、いつ先に逝った仲間たちの所に行くかわからないわね。」

「そうね「スレイシアン」。だから生きてこぬつりて色々と楽しまなきやね。」

それが一番今自分を奮い立たせる言葉と彼女には思えた。

「あら。戦いに勝ち続けるとかじゃないの?」

「あー?」

そこでスチュワートは自分がおかしな」と言つてゐるのに気付いた。戦時下で戦う者が生き残る方法は、戦いに勝ち続ける事だ。それなのに。

「何でそんな」と呟つたのよ?」

「わ、わからない。自分でも・・・」

と、スレイシアンはある」とを考えた。

「もしかして。誰か好きな男でも出来たの？」

「……」

その言葉にスチュワートは顔を真っ赤にした。

哨戒艇101号（後書き）

御意見などをお待ちしています。

揺れる想い

「好きな男でも出来たの？」

先ほど会つたスレイシアンに言われた言葉が、何度もスチュワートの脳裏をよぎる。そして考えれば考えるほど顔が赤くなつてくる。

「そんな・・・好きな男なんて・・・」

強がつて言つてみると、確かに思い当たる節がないわけではない。頭に浮かぶのは、『』の所毎日あつて話をする少尉の顔だ。

「そりや確かに、満はやせじくしてくれぬし、話しあひつと楽しいし・
・」

彼女がもし恋をするとすれば彼以外にはなかつた。なにせ、彼女が生まれて初めて艦魂以外で話し合えたのは彼なのだから。

彼女はアメリカ時代、一度も彼女が見える人物と出会つことはなかつた。だから、満は彼女にとつて初めて話し合えて、共に笑いあう事の出来る人間であつた。

女性だからであろうか、彼はスチュワートにやせじく接してくれていた。そして、彼女が見たこともない外の世界について色々と話してくれた。

艦から離れられない彼女にとって、海以外の世界は未知の世界であつた。その世界を教えてくれるのが彼であつた。

考えれば考えるほど、彼に惹かれている自分に気付く。しかし、それと同時にある考えも浮かんできた。それはもしこの気持ちが恋であつたとしても、叶わない物であることだ。

彼女は艦魂。どんなにがんばっても、物に宿つた魂でしかない。例え人間の形をしていても、人間ではない。だから恋が叶う可能性など、万に一つもない。

彼女は艦魂同士の話し合いで、そうした叶わない恋をして、苦しい思いをした者がいたといつ話を何度も聞いていた。

それが艦魂という存在である彼女たちの定めの一つなのだ。

「・・・もしここの気持ちが本当に恋でも・・・叶わない夢ね。」

自嘲氣味に言うスチュワート。彼女が一筋の涙を流した事に気付いた者は誰もいなかつた。

そして彼女は固く誓つたのであつた。この気持ちを押し殺そようと。

それから数週間後、ついに哨戒艇102号は実戦に就くこととなつた。最初の任務は日本へ向かう輸送船団の護衛であつた。

改装が終わつてからまだ一ヶ月半しか経つていなかつた。平時だつたらありえないことだが、予想以上の艦船の消耗が、前線に大きな皺寄せを生み出していた。戦争は彼女や、乗り込んだ兵士たちの都合を待つてはくれなかつたのだ。

彼女の所属は、三川軍一中将率いる第一南遣艦隊であつた。この時期、既に日本の敗色が濃くなつてきていた。2月にガダルカナル

島から日本軍は全面撤退し、4月には連合艦隊司令長官の山本大将がブーゲンビル島上空で戦死し、士気は急激に落ちつかった。

それでも、最前線の兵にある選択肢は戦うだけであった。満もよくそれを心がけていた。

スラバヤを出港した102号は、一路シンガポールを目指した。そこで、他の護衛艦や物資を運ぶ輸送船と合流する予定であった。これまで貨物船は主に単独で行動していたが、米潜水艦の活動が活発になり始めていたので、船団を組んだり、護衛艦艇をつけたりするようになっていた。

シンガポールまでの航海は比較的安全であった。米潜水艦の活動はかなり活発に成り出してはいたが、この地域にはまだそんなに多くは投入されていないようだった。

この時期、米潜水艦が出没したのは本土からトラックなどの南洋諸島方面に向かう航路上であった。

そのおかげか、102号は何事もなくシンガポールに入港した。

シンガポールは前年に日本軍が占領して以来、昭南市と名を改めていた。かつてあの「プリンス・オブ・ウェーラーズ」も停泊したセレター軍港に102号は入港した。

セレター軍港には大型艦も入渠可能なキングジョージ5世ドッグや浮きドックもあり、この方面的日本海軍の活動拠点であった。

ここに1日停泊した後、102号は他の2隻の護衛艦艇と共に、

7隻の商船を守ってブルネイに向かう。しかし、満は同行する護衛艦を見て驚いた。

「艦長、本当にあんな船と一緒に護衛するんですか？」

満の視線の先にいるのは、小型貨物船に武装を備えただけの特設砲艦だった。

日本海軍は戦線を不必要な程まで広げていたため、深刻な艦艇不足に陥っていた。そのため、優速商船に軽く武装を施し、特設巡洋艦や特設砲艦にしたてていた。他にも特設水上機母艦や特設潜水母艦もあった。

一方、艦長の福井少佐もげんなりした顔で言つ。

「俺だつてあんな頼りない船と一緒に組みたくないよ。しかし命令だ。」

軍隊は上意下達組織なのだ。上の命令に逆らう事は出来ない。

「それはわかっていますが、あんな特設艦船で大丈夫なんでしょうかね？」

特設艦船はそれなりの武装は施している。しかし、専門の射撃指揮装置を積んでいるわけではないし、武装も数はあっても大方旧式だ。おまけに動きも鈍い。

そういうわけで、生糸の海軍軍人からしてみればあんまり一緒に仕事はしたくなかった。

「文句は言つたな。それにシンガポールやスマトラの航空部隊も支援してくれる。取りあえず安心しろ。」

「はあ。」

結局、2人の会話はそこまでであった。

そしてその夜、彼は自室で少女を待った。あることを聞くために。

揺れる想い（後書き）

この作品はフィクションではありますが、史実も交えてあります。例えば、101、102号はいずれも実在する船です。ただし、102号の活動開始は作中より3ヶ月遅い9月からです。

星空を見上げて

夜。満はスチュワートが来るのを部屋で持つた。しかし、一向に彼女は現れない。

「来ないな・・・どうしたんだろ?」

スラバヤに着任してすぐの頃、彼女は毎日のように彼の部屋にやつてきてお喋りをしていた。満が仲間の士官と飲んで遅くなつた時は、彼女が部屋の前で待つてているということもあった。

しかし、1ヶ月ほどして彼女の来る回数は激減した。來てもどこかよそよそしい感じがしていた。満は何度もその違和感について訊ねてみたが、彼女は口籠るばかりで真相はわからなかつた。

「何か気になるな。」

1ヶ月間訓練が続き疲れていたために、彼女を探すまではしなかつた彼だが、今日は探してみる事にした。紙袋を持つと部屋から出て廊下を歩き、ラッタルを登つて上甲板に出る。

戦線から遠いここシンガポールでは灯火管制は行つていない。遠くには軍港や市街地の灯りが見えている。艦も照明を点けているので、夜戦時の様に真っ暗ではない。

彼は甲板を見回してみると、すると、彼女は簡単に見つかった。煙突の根元に腰掛けていた。

「スチュワート?」

満は声を掛けてみた。

「満？ 何よー？」

彼女からの返答は素つ氣無い物だった。

「何よつて、冷たいな。お前の様子が最近変だつたし、今日も部屋に来ないから心配になつて探してみたのに。」

「わ…わ…」めんねさー。」

謝るもの、彼女の表情はどいか哀しさを感じさせる物であるようだ、満には思えた。

彼はそのまま彼女の横に腰掛けた。

「一体こんな所で何やつてたんだよ？」

「星を見てたの。」

「星？」

満は空を見上げてみた。艦の照明のせいで少しばかり見づらいが、そこには星々を散りばめたような星空が広がっていた。

「綺麗だな。」

「ええ。」

「星を見るのが好きなのか？」

何気なくそんなことを聞いてみた。

「ええ。・・・今まで星を見る以外に、夜やることなんてあまりなかつたから。」

「そうなのか？」

「だつて・・・話が出来る人なんか今まで誰もいなかつたし。アメリカの駆逐艦として20年以上働いたけど、話が出来る人は一人もいなかつた。」

その言葉を聞いて、満は思った。

(それって・・・相当つらい事じやないのか?)

艦魂からは、乗員たちは見えているしその言葉もわかる。なのに、例え直ぐ側にいても誰も彼女を気にもとめない。無視されているのと同じである。人としてそれは辛いことであるのは想像に難くない。

「そうだつたんだ・・・それじゃあすぐ寂しかったんじゃないのか?」

それに対して、スチュワートは首を振った。

「ううん・・・他の仲間たちがいたから。決して寂しくはなかつたわ。けど毎日話せたわけじゃないし、他の仲間は出港して港に一人ぼつちつて時もあったわ。・・・その仲間も随分減っちゃた。中には海を知らないまま死んだ者もいたわ。」

「えー？」

満は驚いた。実はスチュワートの原型の平甲板型駆逐艦は256隻がマスプロされたが、中には結局海軍で使われないまま、スクラップにされた物もあった。彼女が言うのはそういう船のことだ。

「いいやつて星を見ていると、仲間達と一緒に見ていた時のことを見出す時があるの。」

「そりか……艦魂には艦魂の苦しみもあるんだね。人間は軍艦や船を道具としてしか見ないけど、本当はその一つ一つに命が吹き込まれているんだね。」

「そり・・・満はそれを分かつてくれているのね。ありがとう。」

彼女は満面の笑みで満を見た。その表情に心を奪われそうになる満。

「ど、どいつも。・・・あ、そうだこれ。」

彼は持ってきた紙袋から何かを取り出した。

「はい、サイダー。」

満は彼女にサイダーのビンを手渡した。日本海軍では、艦内の酒保という売店でこうした物が手に入る。他に最中や羊羹、饅頭なども買うことことが出来た。

「ありがとう。」

二人は栓を開けてサイダーを飲む。

「甘い。」

彼女は表情をさらにほころばせた。先ほど星を見ていた時は随分と強張った表情をしていたのとは大違のだ。

とりあえず彼女が喜んでくれたので、満としては一安心である。と、ここで満は彼女に聞きたかったことを思い出した。

星空を見上げて（後書き）

御意見などをお待ちしています。

船魂たちの言葉

「ヒーリング、スチュワート。」

満は本題に話を移した。

「うん? 何よ?」

「実は聞きたい事があるんだけど。」

満が真剣な眼差しで聞いてきたために、スチュワートは何事かと思つた。

「な、何よ。そんな真剣な表情して。何が聞きたいのよ? 答えられる範囲でなら答えてあげるわよ。」

「実はセ・・・今回護衛する船や一緒に護衛任務につく船の船魂たちが、一体どうじつことを言つてているのか聞きたいんだけど?」

すると、スチュワートがキョトンとした顔をした。

「え? そんなことを聞きたいの?」

何を言われるのか身構えていたのに、意外な質問に拍子抜けしてしまったのだ。

「なんだよ? その表情は?」

「だつて、すごく真剣な表情で聞いてきたから、もつとすこじ」と

を聞かれるかと思つたじやない。」

別の船魂や艦魂の言つてゐる事など、スチュワートにしてみれば普通に話し合う中で知れて、しかも愚痴の様な物である。そんなことを知つて何が面白いのだろうと思つたのだ。

「まあお前にとつちやす「くないかもしれないけど、お前以外の艦魂が見えない俺には気になる事なんだよ。」

「ふーん・・・まあいいわ、じゃあ教えてあげる。」

スチュワートは一隻一隻がどういうことを話していたか喋り始めた。ちなみに、今回護衛するのはいずれも戦時標準船の中で小型に分類される1000t未満のタンカーだ。俗に海上トラックと呼ばれる船だ。

戦時標準船とは、戦時など時間、資材、予算などを削減する目的で大量建造可能なように設計を簡略化し、短期間で多数が建造される船のことだ。アメリカのリバティー船は特に有名であるが、日本でもこの種の船はもちろん造られていた。

ただし、日本の場合アメリカと違つて工業技術が大幅に劣つており、しかも熟練工不足も祟つて腹痛船といわれる欠落船が随分と多かつた。

故障は日常茶飯事で、中には甲板に水を流したら下の階に雨漏りが起きたという話もある。

その船を都合4隻守る。この種の船は現在主に産油地から石油を精製所や、貯蓄所に運ぶ近距離輸送を行つていた。まさか1年後に

は、この船で本土まで直接石油や物資を運ぶ必要が出てくると予想できた人間は、この時点ではいなかつた。

「まず、「雛菊丸」の船魂、みんな縮めてヒナツて呼んでいるけど、彼女はまずエンジンに欠落があるせいか知らないけど、今日は体調が悪そうだったわ。だから、挨拶以外に会話らしい会話はしないわね。」

「それは随分と氣の毒な船魂だな。」

満も腹痛船の噂は聞いていたが、今まであくまで他人事だった。しかし、いざ側にそういう存在があると実感が湧いてくる物だ。

「次に「泉丸」の船魂ね。彼女は凄く明るいキャラね。早く海に出たい出たいって言つていたから。笑顔が良く似合う可愛い娘よ。」

「ふーん。その笑顔が見れないのは残念だな。」

「次に「嵐丸」ね。彼女はすごく気が強くて負けず嫌いだったわね。護衛なんかいらないって豪語していたわ。まあ、いざ話し出すと意外にデレデレしていたけど。」

(ツンデレー?)

危うく口に出しそうになつたその言葉を、満は飲み込んだ。時代が合わないからだ。

「へえ、船魂にもひねくれ者がいるんだ。」

「で、最後の「疾風丸」の船魂は、確か海軍への文句を言つていた

わね。」

海軍という単語に満は反応した。

「文句つて？」

「ええとね、確かに、海軍は派手な艦隊決戦や海戦のことしか頭にならんだ。私たちを守る気なんて毛頭ないんだ。私たちがいくら沈んでも気にもかけない。私たちが運んだ油で戦っているくせにて言つてたわねつて、どうしたの満？」

満は表情をしかめて黙り込んでいた。

彼を始めとして、多くの海軍軍人は艦隊決戦、つまり敵との正面決戦こそ戦争の趨勢を決める物と信じていた。だから、後方での警備任務や船団護衛などといつのは女子供の仕事と考える節があつた。

しかし、よくよく考えてみれば、海軍が決戦を行うためには艦隊を動かすための石油や、戦いで消費する砲弾などが絶対に必要である。そしてそれら物資を運ぶのが彼女ら商船の役目であつた。彼女らあつてこそ、海軍は動けるのだ。

彼女らが無事に任務を遂行できなければ、自分たち海軍は動く事も戦う事も出来ない。だが、軍人は官尊民卑の塊である。彼女らがいくら沈もうが気にもとめない。それどころか、彼女らを一種の奴隸に様に考えている人間もいた。

しかし、もし彼女らが沈む事があるといつことは、味方の防衛権に潜水艦の進入を許してしまっている海軍にこそ責任があるはずである。攻めを負う事はあっても、彼女らを批判することなど出来な

いはずだ。

そして満も今までその考えを持っていたのだから、恥じずにはいられない。

「ふ・・・俺ってバカだな。」

自嘲気味に出たセリフがこれだった。

「はあ？」

訳わからなさそうに彼を見るスチュワート。

「今までずっと船団護衛なんて大した仕事じゃないと思ってたけど、そうだよな。彼らがいるから俺たちが戦えるんだよな。全然気付かなかつたぜ。悪い事をしてきたもんだ。明日からの護衛任務、一隻も沈めない思いで、戦わないとな。」

その言葉に、スチュワートはクスッと笑った。

「なんだよ？」

真剣に喋ったのに笑われたので、満は不快であった。

「あなた随分変わってるなって思つて。普通の軍人だつたらそろは思わないんじやない。まあ、もしかしたらそれがあなたらしさかもね。・・・あ、あと一緒に護衛する「柏丸」の船魂は、よろしくお願ひしますだつて。期待してくれているみたいよ。」

「そつか・・・その期待にそわなくちゃな。」

満はしみじみやう思つたのであつた。

船魂たちの言葉（後書き）

今回の商船の名前は一定の基準でつけています。
御意見・御感想をお待ちしています。

それぞれの想い

翌日、哨戒艇102号の艦橋には真剣な眼差しで任務に挑む満の姿があった。

「取り舵20度！」

「取り舵20度、ようそろい。」

福井艦長の命令を復唱し、満は舵輪を回した。

「後続船に異常ないか？」

「陣形に多少のバラツキがありますが、全船付いて来ます！－！」

艦橋の両側に立つ見張り兵が報告してくる。

「そうか。まあ寄せ集めの輸送船団だから仕方あるまい。」

その言葉を引き継ぐように、満が言う。

「それに、商船は海軍の艦隊のように集団行動に関する訓練など全く行つていません。我々がしつかり護衛しなければ良い的です。責任重大です。」

「お前、随分今回の仕事に力入れているな。まあ、結構なことだ。こいつら船団護衛任務を軽んじる人間が多くて困る。乗員の中にもかなりいる。お前みたいに率先してやってくれる人間がいれば、そういう言ひ連中も少しばらやる気になるだろう。」

福井は何かを思いつめたように呟いた。

「艦長は今回の任務にはじつ思つてゐるのですか？」

「もちろん重要な任務だ。独逸のジボートはイギリスの商船を片つ端から沈めているそうだが、前大戦ではそれでイギリスは干上がる寸前まで行つたそうだ。我が国も島国だから、もし通商路を破壊されたらお終いだ。俺に言わせれば、艦隊決戦よりも、こうこつた船団護衛のほうが遙かに重要な任務であると思うだ。」

満はおやつと、思つた。昨日はあまり乗り気でない様な発言をしていたはずだが。

「失礼ながら艦長は昨日、仕事には反対するような言葉を言われませんでしたが？」

「別に船団護衛に反対したわけではない。特設艦船と組む事に反対したんだ。お前はあんな船でまともな戦いが出来ると思うか？」

「いいえ。」

それが満の率直な感想だつた。特設艦船で戦争が出来るのなら正規の艦艇など必要ない。

「だらう。輸送船や客船に武器を載せて特設巡洋艦とか、特設敷設艇なんて名前で呼んでも、所詮は商船に過ぎない。潜水艦相手でも戦うのは苦しからう。ましてや相手が正規軍艦だつたらどうしようもない。本来あいつ船は使うべきではないんだ。だいたい、本来は我が軍が自前で護衛艦を揃えるべきだつたんだ。あんな「大和」

なんて戦艦がなくても、本艦のような小型艦艇200隻と充分な航空機を揃えさいすれば、戦争に負けることなど無い。」

「の言葉に、満は少し怖くなつた。彼自身としては、充分考慮する意見であるのはわかる。しかし、現在も海軍の主流な考えは艦隊決戦主義だ。この艦の乗員にもその考え方を持っている者が多い。今福井の意見は彼らに対する冒瀆となりかねない。

「艦長、今の意見はそれなりに正しいとは自分も考えますが、他の乗員の前、いやそもそも我が海軍内で仰るのは少々危険では？」

満は警告の意味も含めてそう言つた。しかし、福井は彼の言葉を笑い飛ばした。

「今更そんなの怖がるような俺じゃないよ。なにせ、俺はその意見を上面に言つたせいで閑職に回された人間なんだからな。」

「そりなんですか？」

「ああ。戦争が起きる前にな。俺は兵学校時代から水雷とか砲撃とか、そういう他の人間がやつている分野にはほとんど興味が無かつた。だから、潜水艦と機雷を専攻に選んだ。そして第一次大戦でのリボートの戦術に注目し、我が海軍でもシーレーン（通商路）防衛にもっと力を入れるべきだと具申したんだ。ところが、それが元で上官と喧嘩しちまつてな。卒業してからは退役寸前の船の艦長ばかりやられられたよ。」

「そりだつたんですか・・・」

艦長の意外な経歴に、満はただ驚くしかなかつた。

「まあ、この船は確かに古いが俺は好きだ。たとえ元がアメリカの船でも、今は俺が指揮する船だ。俺はこの船で働くことに愛着を持つている。」

「自分もです。自分も、この船が大好きです。」

そう言う彼の脳裏に浮かび上るのは、この艇に宿る1人の少女の姿だった。

彼らが真剣に働いたおかげか、船団は敵潜水艦の襲撃を受ける事も無く、全船目的地のブルネイに入港する事が出来た。

船団はここで解散し、哨戒艇102号は単独でシンガポールへと戻った。そして、この船団で終戦まで生き残らえる事ができたのは、彼女だけだった。

各貨物船はその後の激戦の中で全て撃沈され、さらに護衛任務と共に行つた特設敷設艇「柏丸」はこの直後、沖縄からほどへ向かう少年少女たちを乗せた貨物船「湖南丸」の護衛任務中に、「湖南丸」とともども撃沈され、多くの若い命とともに東シナ海に没する事となる。

哨戒艇102号は、その後も南方資源地帯における船団護衛任務を行つたが、その頃から本土へ向かう輸送船団の犠牲がうなぎ上りで上昇した。

米軍は新型潜水艦「ガトー」級をマスプロし、その多くを日本と資源地帯との間を結ぶ通商路破壊に振り向けてきた。さらに、それまで問題多発であった魚雷の信管の不調も改善され、レーダなどの

電波兵器面での優位もあいまって、日本輸送船団や海軍艦艇に猛威を振るい始めた。

日本海軍もようやく船団護衛の重要性に気付き、海上護衛總隊を設置した。さらに、船団護衛用の新型護衛艦である海防艦のマスプロ、新型聴音器の開発などを行つたが、もはや遅きに失していた。

数が足りなく、電探などもアメリカに比べて数年もの技術格差があり、さらにより込む乗員も一流の乗員が連合艦隊に取られてしまつたために、主に2流や予備役からの復帰者が充てられたために、その戦力は米潜水艦に叶う物ではなかつた。

ただそれでも、現場の人間たちは黙々と働いた。哨戒艇102号は船団護衛任務を続けながらも大きな損傷も被ることなく1年近くを日本海軍艦艇として過ごした。

満は航海士見習いから航海士に昇格し、102号で戦い続けた。そして昭和19年8月24日、仏印沖でそれはおきた。

それぞれの想い（後書き）

御意見・御感想・要請などお待ちしております。

戦闘

その日、仏印沖で船団護衛を行なつてゐた哨戒艇102号は、水中聴音器に敵潜水艦と思しきスクリュー音を探知した。

「総員戦闘配置！！」

艦内に配置を告げるブザーが鳴り響き、ヘルメットを被つて戦闘態勢に入った乗員たちがそれぞれの持ち場に付いていく。

満もヘルメットと救命胴衣をつけた。そして、舵輪を握る力が何時も以上に強くなる。戦闘から来る緊張のようだ。これまでに哨戒艇102号は数度敵との接触はあつたが、いずれも誤報か本格的戦闘に至らない物ばかりであつた。しかし今回は敵を攻撃可能範囲に納めていた。

「後部爆雷戦用意！！」

相手は潜水艦である。これが連合軍なら前方攻撃可能なヘッジホッグやスキッドがあるのであるが、あいにくと対潜攻撃を軽視してきた日本海軍にはそのような兵器はない。旧式の艦尾から投下する爆雷のみである。

哨戒艇102号の強みは、ソナーと聴音器が最新式である事だ。日本製のこれら音波兵器は対潜哨戒機に搭載されている磁気探知機を除けば、欧米の同類兵器の足元にも及ばない性能しか有していない。

しかし、それでも102号搭載の3式聴音器はこれまでの93式

に比べれば遙かに良好な性能を持つていた。

「田標敵潜水艦、針路70度。速力ならびに深度は不明。」

聴音室からの報告が逐一艦橋へともたらされる。

「面舵70度、機関最大船速へ！！」

「面舵70度、ようやくひつ。」

福井艦長の命令を復唱し、満は舵輪を大きく右に回した。そして、機関室では回転数が上げられ、速力がグングン上がっていく。

「目標、間もなく至近です！！」

「爆雷投射始め！！」

命令と共に、艦尾の投下基条から爆雷が落とされる。また、ドンという音を立てて爆雷投射機からも爆雷が投射される。

そして数秒後、海中で爆雷が爆発し、一瞬海中で光ったと思うと、次の瞬間には鈍い爆発音と、白い水柱が出現する。それが連続して数回起る。

見た目は派手であるが、この爆雷による対潜戦闘は下手な鉄砲数撃ちや当る戦法だ。潜水艦を沈めようとするならば、相当な至近距離での爆発が必要である。となると、そうなるまでひたすら爆雷を投下し続ける以外に方法はない。

根気のいる戦闘である。大西洋の戦いでは数十発の爆雷を使って

戦う事など日常茶飯事であった。対潜戦闘は長期戦である。

「どうだ？漂流物や油の流出は確認できたか？」

福井の問い合わせに對して、直ぐに返事が帰ってきた。

「黙ります。確認できません。」

どうやら失敗したようだ。こつなるとしばらく待つしかない。爆発音の残音で聴音器は使い物にならないからだ。

「全員皿を皿にして水面を見張れ！敵の反撃に警戒しろ！－！」

もし敵潜水艦が反撃するとすれば、こちらが耳を奪われている瞬間だ。双眼鏡を持った兵士たちが水面を血眼になつて見る。

だが幸いにも、敵の反撃はなかつた。そして、聴音室から再び報告が入り始めた。

「敵艦、本艦の320度方向！－！」

戦いはクライマックスに入っていた。既に4時間近くも追いかけっこを展開した2隻であったが、102号の方は爆雷を使い果たす

寸前であった。恐らく、後一回が勝負である。乗員の疲労も限界に近い。

「これで最後だ、聴音室しつかり頼むぞ！！」

「わかつております。」

伝声管によるやり取りにも、俄然力が込められている。

そして、数分後。

「敵潜水艦、本艦270度方向、速力速い！」

「取り舵一杯！速力第一船速！！」

「取り舵一杯！」

既に汗だくになつてゐる満が舵輪を左へと一杯に回す。第一船速は21ノットだ。追いつくまでに時間が掛かるが、水中聴音器が聞こえやすいように配慮したのだろう。

「敵艦、本艦前方を進行中！・・・間もなく通過！」

「よつし・・・爆雷投下！！」

最後に残つていた爆雷が一斉に海中へと投下された。そして、今日何度もかになる光景が起つてゐる。爆発音、そしてそそり立つ水柱。

その光景を見ながら、乗員はひたすら祈つた。「当つてくれ！..」
と。

そして、爆雷の爆発が收まり、海面が下の様子に戻っていく。その場所を、見張り員が双眼鏡で見つめる。

報告は中々こない。今回も駄目だつたのか？半ば諦めムードが艦を支配し始めたその時、1人の水兵が叫んだ。

「海面に漂流物ならびに、油膜を確認！－！」

それは待ちに待つた報告であった。

「減速！漂流物回収用意！」

福井は艦のスピードを落として、漂流物を拾い上げる方法を選んだ。油膜や漂流物は一応撃沈の証しであるが、狡猾な艦長だと時々ゴミや油をわざと流して撃沈を偽装する事があった。そのため、念を入れたのである。完全に止めないのは、他の潜水艦に襲撃される恐れがあるからだ。

乗員が竹ざおなどを使って甲板から海面に浮き上がった漂流物を救い上げる。浮き輪、救命胴衣、食料が入っていた木箱など、水に浮く物が次々と引き上げられた。

そして、撃沈確実といえる証拠が浮き上がった。乗員の死体である。しかも複数だ。

福井は撃沈を確信すると共に、死体を丁重に葬るよう命令した。例え敵が同胞を殺したにくい敵であり、さきほど自分たちと死闘を繰り広げた相手であつても、最低限の礼節は尽くさなければいけない。それが海の男の流儀だ。

「祖国のため、勇敢に戦い命を散らした敵兵に対して、敬礼！！」

引き上げられた遺体は布にくるまれ、水葬された。任務を引き継いだ満も、その光景を敬礼しながらじっと見ていた。

その日の夜は、敵潜水艦撃沈の功績で乗員全員に特配の酒が配られ、艦内は戦勝祝いを行なう兵士たちの姿で埋められた。

そんな中で、満は仲間の士官たちとの飲みを適当なところで引き上げ、自室に向かった。

戦闘（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

戦争の現実

艦内では乗員たちが敵艦撃沈を祝っていた。初めての戦果を上げたのだから当然である。しかし、長野少尉だけは浮かない顔をしていた。

彼は非番の士官たちと共にガソルームで休んでいた。しかし、その顔には笑顔はなく、険しい表情をしていた。

「どうした長野？ 敵艦を撃沈したんだぞ、めでたいことじやないか？ そんな辛氣臭い顔をせずにお前も一杯飲めよ。」

仲間の士官が一升瓶と茶碗をもつてやって来て言つ。

「ああ。けど、ちょっと今は飲む気がしないんだ。お前たちだけで楽しめよ。俺は部屋で休んでるから。」

「どうか。けど、体の調子が悪いなら医務室へ行つたらどうだ？」

「大丈夫。そこまで悪くはないから。」

そして彼はガソルームを後にした。そして一人廊下を歩いていった。その向かう所は先ほど言つた士官室ではなく、甲板だった。

艦は今独航で寄港地へと向かつていた。もちろん警戒配置は解いておらず、乗員も当直の者がちゃんと配置に就いていた。艦自体も灯火管制を行なつているので甲板は真っ暗である。灯りは空に光る星月だけだ。

満は日が慣れるのを待つていつもの場所へ向けて移動を始めた。
煙突の根元。そこが彼女とのところいつも会う場所である。

そして今日も彼女は座つて待つていた。

「スチュワート。」

満は彼女に声を掛けてみた。

いつもなら声を掛ける前からこちらに何かしらしてくる彼女だが、
今日は座り込んで何かを思いつめているようだつた。

「満。あなたは他人みたいに喜ばないの？」

満はその質問に答えず、スチュワートの隣に腰掛けた。

「やつぱり今日の」と……米潜水艦を撃沈した事を気にしている
のか？」

満が聞くと、彼女は少しばかり視線をずらした。

「別に気にしてないって言つたら嘘だけだ……もとから覚悟して
いた事だから。それに、一回一回深く考えていたら、この先戦うと
きに何にも出来なくなつっちゃうわ。もつとも、私は艦魂だからそ
んなこと関係ないかもしねいけど。」

そういう彼女の表情は、どこか強がつてゐるようで、哀しみを帶
びていた。

「そうだよな。お前たちがどう思つて、この艦を動かしていくのは

俺たち人間なんだよな。・・・けど、俺としては憂鬱だな。」

「なんあなたが憂鬱になるのみ?」

「だつてさ、考えてみたら俺たち人間がこいつして戦わなきやせ、お前たちも戦う必要がないはずじやんか。戦争のことをどうこいつ言つのもなんだけど、もし開戦前に政府が非戦を決断していたら、俺たち国民が決断させていれば、お前たち艦魂が殺しあう姿を見ずに済んだから。不思議だよな、この艦に乗り組むまでは、戦争で人が死ぬ事も、船が沈む事も仕方がないと思っていた。けど、お前と出会いつて船にも命があるつて知つたら、なんか戦う気が失せちまつ。なんでだろ?」

その言葉に、スチュワートは返答しようか迷つた。彼女としては、「それは私に同情しているからじゃないの?」といつ答えが思い浮かんだ。

しかしながら、血画血贅のような氣がして言つのは憚られた。

「なあスチュワート?」

「な、何よ?」

「お前は自分がかつての味方と戦わされる事を、仕方がない事つて片付けられるか?」

「えー?そ、それは・・・」

スチュワートとしては、これまでなら仕方ないと片付けてきただろう。しかし、今は何故かそう言えなくなっていた。

(なんと言えないのよ・・・今日の戦いが嫌だつたから?満の話を聞いたから?)

自問自答するスチュワート。そして、その瞼に今日戦つた潜水艦の艦魂の最後の姿が映つた。撃沈されバラバラになる直前、潜水艦の少女は笑顔でこちらに敬礼していた。

平和な時なら、その笑顔の敬礼を心地よく見ることが出来ただろう。だが、今日のその敬礼を見て、スチュワートはとてつもない罪悪を感じた。あんな素晴らしい人を自分は静めなければいけなかつたのかと。

そう考えた瞬間、彼女の頬を冷たい物が一筋流れた。

「あ、あれ?」

慌ててそれを拭き取るスチュワート。だが涙は止まらない。

「何で止まらないの?」

必死に涙を止めようとすると、流れる涙の量は増えるばかりだった。

「何で・・・何で!!私は心に誓つた・・・例えアメリカの船と戦つても悲しまないって誓つたのに・・・」

だが、戦う前と実際に戦うでは話が全く違つていた。戦つて感じたのは、勝利の高揚ではなく、虚しさと悲しさだった。

「スチュワート……大丈夫か？」

満が心配して声を掛けて來た。

「う・・・うん。すぐに止めるか・・から。」

彼女の強がりとは裏腹に、本心は正直だった。彼女の心の傷を癒す涙は留めなく流れしていく。そして、いたたまれなくなつた満がある行動にでた。

「え！？」

彼女の背中に手を回して、その体を自分に抱き寄せたのだ。つまり彼女を抱いたのである。

「み、満！」

「泣きたいなら正直に泣けよ。強がる必要なんてないんだ。お前たち艦魂がそんなことをする必要はないんだ。・・・ごめん、本当にごめん。俺たち人間が、こんな戦争さえしなきや、お前達は幸せでいられたんだ。」

「そんなん・・・別にあなたが謝る事なんてないわ、艦魂として生まれたからには仕方がないことなのよ。」

「違う！武器を使うか使わないか決断するのは人間の心一つだ！例えそれが剣だろうと、戦艦だろうと変わらない！！俺達は身勝手すぎた。お前たちをたんなる物としか考えずに使つっていた。けど、機械にも心は宿るんだ。その事をわかつていなかつた。」

スチュワートは驚きの顔で彼を見つめていた。

「そんな風に言つてくれる人は、あなたが初めてよ・・・ありが
とう。」

「お礼なんか言われる理由はないよ。ただ、今は俺がお前の支えにな
なつてやれるから・・・だから、泣きたいだけ泣けよ。正直に。」

そして彼女は彼の胸に自分の顔をうずめて泣いた。

戦争の現実（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

敗戦への坂道

昭和19年といつ年は、大日本帝国の敗北が確実になつた年であった。6月に絶対国防圏の一角であり、本土への爆撃可能な距離にあるマリアナ諸島に米軍が上陸し、これを占領した。またその救援のために連合艦隊機動部隊が総力を上げて行なつたマリアナ沖海戦も一方的な大敗北で終わつた。

10月、米軍は太平洋における日本軍最後の拠点であり、南方資源地帯との航路を守る上で必要不可欠なフィリピンへと上陸した。そして、日本海軍がその占領を全力阻止するべく行なつた最後の作戦である捷一号作戦こと、レイテ沖海戦も多数の艦艇を失うだけに終わった。

いよいよ米軍は日本の喉元に迫り、日本降伏のカウントダウンが始まつたのである。

そんな中、長野満中尉が乗り組む元米駆逐艦「スチュワート」と哨戒艇102号は仏印近海での船団輸送を幾度となくこなしていた。すでに米軍の潜水艦や航空機の跳梁跋扈著しいこの海域においては艦艇、船舶とわず多くの船が撃沈されていた。その中で、102号は不思議と損害を負つ事がなかつた。

昭和20年初頭、哨戒艇102号は兵装増強のために日本海軍の一大拠点である日本本土の呉軍港に入港した。

レイテ沖海戦で多数の艦艇を失つたものの、この時点で日本海軍にはまだ「大和」を始めとする戦艦5隻、空母4隻が健在だつた。だが、その内情は寂しい物だつた。

「「榛名」に「伊勢」、「日向」もいる。見えないけど「大和」もドッグで修理中って聞く。これだけの戦艦があるので、動かす燃料がないなんて。」

満が遠景に見える戦艦たちを見ながら溜息をついた。

「燃料がなきや、戦艦もただの浮かぶ鉄くずね。」

隣に立つ哨戒艇102号の艦魂、満は前艦名のまま「スチュワート」と呼んでいる少女が言った。

「本当に情けないよ。いまさらながら大井大佐の言っていたことが正しかったんだなって実感できるよ。」

長野の言う大井大佐とは、日本のシーレーン防衛を担う海上護衛総隊参謀の大井篤大佐のことだ。彼は常々海上護衛の重要性を海軍省や海軍軍令部に訴えてきた男である。島国であり、資源依存国である日本が生き残るには、シーレーン防衛が最重要課題であると。

しかし、日露戦争以来の艦隊決戦主義という亡靈にとりつかれた海軍軍人の中に、彼の言葉をとともにとりあつ者は少なく、むしろ邪魔があつかいをしたり、侮蔑する者の方が多いかった。

海上護衛総隊は満足な装備も、人間も「えられないまま戦いを続けてきたが、それももはや限界だつた。

「満の前で言うのもなんだけど、日本にはもう勝ち田なんてないわ。それなのに、どうして戦争をやめないのかしら?」

アメリカ生まれのスチュワートは日本がどうして戦い続けるのかよくわからなかつた。特攻などはそのもつともたる物だつた。

「さあね。一海軍軍人の俺に政治のことなんてよくわからなによ。願わくば早いところ講和して欲しいよ。そうすれば無駄な死人も出さずに住む。」

満の言葉はこの時代の日本では問題発言であるが、海軍の軍人の中にはそう考える人間も実は多かつた。

「それが一番よね。」

「うん。」

2人はそう言つと、じぱりへ穩やかに波を立てる瀬戸内海を眺めていた。そして艇が速度を落とし始めた所で、スチュワートが口を開いた。

「ところで、満は私が改装している間どうするの?」

「スチュワート」が小規模な改装を受ける間、乗員は交代で1週間の休暇を出される予定だつた。

「俺は故郷に帰らつと思つてゐよ。母さんと2年間も会つてないか

ら。」

「そりゃ。しっかり親孝行してらつしゃいよ。」

「やつするよ。」

」の翌日、満は離艦して故郷の岐阜へと帰つていった。スチュワートは自分と会話できる人間もいなくなつたため、主に周りの艦魂たちとお喋りを楽しむ事となつた。

もとアメリカの船とはいえ、同じ艦魂同士である。そこに国境といつ物はない。

スチュワートがそういうでありますように、艦魂のほとんどが少女の姿をしている。そして、性格も、立ち振る舞いも、そして会話する内容も人間の少女がすることと変わりなかつた。その中で、スチュワートは同じ駆逐艦だからというわけでもないが、駆逐艦「雪風」の艦魂と仲良くなつた。

「雪風」は陽炎型駆逐艦で、開戦以来幾多の海戦に参加しながら一度も大きな被害を負つていないことから、不沈艦として名高いが、その艦魂はといふと眼鏡をかけた無口な少女だつた。

特に騒ぐ事も無く、口数も少ないので一人でいることも少なくないのだが、なぜかスチュワートが喋りかけると、会話に参加してくれた。というか、スチュワートに対して何かしら気にしているような感じだつた。

スチュワートがそれについて聞くと、理由を話してくれた。

昨年のレイテ沖海戦において、「雪風」は米護衛空母部隊との戦闘中、1隻の勇敢な米駆逐艦と戦つた。その艦名は「ジョンストン」。

「フレッチャ」級駆逐艦の「ジョンストン」は圧倒的多数の日本艦隊に、幾度も突撃を加えて混乱をさせ、ついには護衛空母を守りき

つた。だが、最終的に多数の砲弾を浴びて撃沈されている。

「雪風」艦長の寺内中佐は、沈み行く「ジョンストン」への攻撃を禁じ、さらには漂流する敵乗員たちに敬礼し、その勇戦を讃えた。

後に60年以上経つても美談として語り継がれたこの物語を、当事者である雪風も感動の想いで見ていた。

「私はあんな勇敢な駆逐艦を生み出したアメリカという国に興味がある。もし人間として生まれ変われるのなら、一度アメリカへ行ってみたい。」

そう雪風に言われたとき、スチュワートはかつての祖国のことを再び誇りに思つたのである。

「ありがとう雪風。もし私があなたと同じ世に生まれ変わったら、あなたを絶対にアメリカに招待するわ。」

そんなことあるまいと思いながらも、2人はそう言ってお互い微笑んだ。

こうして戦争という殺伐とした状況下で、艦魂といつ存在の少女達は明るい心を失うことなく生きていた。

だが、戦争はいよいよ日本にとって絶望的、そして悲劇的な結果を生もうとしていた。時に昭和20年3月。哨戒艇102号は改装を終えて工廠を出たが、それと前後して日本には死と破壊という嵐が荒れ狂う事となつた。

日本海軍の黄昏

昭和20年3月、来る4月からの沖縄攻略作戦に先立つ形で、米軍は九州や四国の日本陸海軍航空基地と、呉の軍港地帯を攻撃するべく動いた。その主力はウルシー環礁の基地から出撃した空母部隊だった。

3月19日、この機動部隊から飛び立った艦載機が呉軍港と停泊中の艦艇に襲い掛かった。この艦載機群に対し、四国松山飛行場に展開する海軍第343航空隊、通称剣部隊の「紫電改」が迎撃を行い、54機の撃墜を報じた。（米軍側の記録では撃墜された機体は20機前後とされている。）

そうした航空隊が輝かしい戦果を上げた一方で、水上部隊は大きな打撃を被っていた。まず連合艦隊旗艦を努めたこともある軽巡「大淀」が大破し、さらに軽空母の「龍鳳」も損傷を負っている。その他の艦艇にも若干の損害が出ている。

そんな中で、哨戒艇102号は無事であった。しかし戦況は日を追うごとに厳しい物となっていた。

この空襲の少し前、3月10日から数日間の間、東京をはじめとする名古屋、大阪、といった都市がマリアナ諸島から飛び立ったB29戦略爆撃機の低高度無差別爆撃を受け、民間人を含む多数の犠牲者を出している。先月から激戦が繰り広げられた硫黄島も既に米軍の手に渡ったも同然であり、陥落したのはそれから間もなくのことだった。

南方からの物資輸送はほぼ絶望的となり、石油、鉄、ゴム、ボーキ

キサイトといった戦略物資は全く日本本土には入つてこなくなつた。かろうじて満州などから食料や石炭が入つてきていたが、米潜水艦は日本海にも侵入していたため、それらが止まるのも時間の問題だつた。

当初は石油をはじめとする資源不足を原因にしてはじまつたアメリカとの戦争は、いつのまにか継戦理由が国体の護持に代わるところまで追い詰められていた。

政府はソ連を仲介にしての和平交渉に一縷の望みを掛けていたが、すでにソ連はアメリカとの密約で日本への宣戦布告を決定していた。このことを日本政府は全く知らず、ソ連にただいいように弄ばれている状態だつた。

その間も戦争は続く。4月1日、米軍はついに日本本土の一角である沖縄本島に上陸を開始した。同島での戦闘は、県民の疎開が不十分だつたために、40万人の民間人を巻き込む悲惨な戦いとなつた。それに対して本土の日本軍が行ないえたのは、九州南端の航空基地から、ありつたけの特攻機を発進させる以外になかつた。

しかし、御前会議においての天皇の「海軍にもう船はないのか」という御下問を受けて、急速連合艦隊司令部は海軍最後の有力艦隊である第一艦隊に対し、沖縄への水上特攻を命令した。つまり世界最大最強の「大和」の46cm砲で片つ端から沖縄近海の敵艦船を撃ちまくりそれでも余裕があるなら沖縄に乗り上げて砲台として使う。

出撃予定艦艇は戦艦「大和」、軽巡「矢矧」、駆逐艦8隻の合計10隻のみ。対する敵艦隊は沖縄近海に展開する米艦隊の艦隊用空母だけで16隻、戦艦は新旧併せて20隻以上。はつきりいって勝

てる要素など1つも無かつた。

「」の作戦名は菊水作戦。それは、戦果など全く期待できない、ただ大日本帝国海軍の名誉と意地を守るためだけの自殺にも等しい作戦だった。それでも、上層部より正式な命令が下されたのならば行かねばならないのが軍人の務めである。

「大和」以下第2艦隊の各艦艇は、当初は本土決戦で敵艦隊に決戦を挑む、もしくは浮き砲台して戦う予定だった。だからこの沖縄突入はまさに寝耳に水の作戦であった。乗員達は慌しく出撃の準備を整えた。

燃料の重油は残り少なかつたが、タンクの底から帳簿外の燃料を吸い出すなどして、「大和」には沖縄と本土を2回往復する分の燃料が積まれた。また他艦から補充するなどして、搭載できるギリギリの数の弾薬も併せて搭載された。そして乗艦したばかりの新兵や士官候補生、老兵などの人間が降ろされた。

「」にして出撃準備を整えた第2艦隊の各艦艇では、出撃前日となる4月5日夕方、備蓄されていた酒や菓子が乗員たちに振舞われた。彼らはこれが最後の宴会と覚悟し、飲んで食つて、歌つた。

一方、艦に宿る艦魂たちもそれぞれに挨拶を交わし、武運長久を祈った。哨戒艇102号の艦魂、スチュワートも親友である「雪風」の艦魂と挨拶を交わした。

「スチュワート、今日までありがとう。恐らく今度ばかりは私も帰つてこられないと思う。後のことによろしく頼む。」

普段から無口で单刀直入にものを言つ彼女は、スチュワートに会

うなりそう言った。

「そんな悲しいこと言わないで・・・て言いたいところだけど、今回の大戦は全滅必至って聞いたわ。けど雪風、私はあなたなら絶対に今度も帰つてくるつて信じているわ。」

これがスチュワートが言えた精一杯の励ましの言葉だった。

「・・・・ありがとう。」

「約束果たせなかつたわね。『ごめんなさい』。」

その言葉に対し、雪風は一コツと笑みを浮かべた。

「気にしないで。私たちは軍艦に憑いた艦魂。自分の意志でどうなるわけじゃない・・・ただ、もし今度平和な時代にお互い生まれ変われたら、その時はまた友達になろう。」

「ええ・・・」

「それじゃあ、他の艦ひとにも挨拶しなくちゃいけないから。」

「うん。」

これがスチュワートと雪風にとって、今生の別れとなつた。

翌日、出撃した第2艦隊は早くも潜水艦に捕捉され、その翌日には約400機の敵航空機の波状攻撃を2時間近く受け、戦艦「大和」、軽巡「矢矧」、駆逐艦4隻が撃沈されて壊滅した。

「雪風」はこの戦いでも幸運艦としての運を発揮し、大きな被害もなく帰還した。しかしその後は関門海峡が機雷で封鎖されたために、主に舞鶴方面で活動した。そのため哨戒艇102号と顔を会わせることは、2度となかった。そして復員船として活動した後、彼女は賠償艦として台湾海軍（中華民国海軍）に譲渡され、そのまま現地でその生涯を終えている。

この第一艦隊による沖縄への水上特攻が、帝国海軍連合艦隊の最後の有力な水上艦隊による作戦行動となつた。以後燃料の重油を失った残存艦艇は航行不能に陥り、むなしく瀬戸内海で浮き砲台として戦うことを強いられたのである。

日本海軍の黄昏（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

戦争の結末

昭和20年7月28日。この日は帝国海軍にとって悪夢の1日となつた。3月19日に「づく大規模な米軍による空襲」が呉軍港と、近海に在泊する艦艇に対して行われたのである。その結果は悲惨以外の何ものでもなかつた。

既に帝国海軍の主力艦艇は燃料も無く、最低限の乗員を残して海上砲台になつていていた。それでも戦艦「榛名」「伊勢」「日向」、空母「天城」「葛城」などそれなりの数の艦艇が残されていた。そして米軍にはそれら艦艇を黙つて見過すほど慣用ではなかつた。

この日機動部隊から来襲した航空機によつて、これら艦艇のほとんどが目標となつた。もちろん、攻撃される艦艇側も残つた乗員の手によつて対空戦闘が行われ、主砲、高角砲、機銃、噴進砲など全ての武器を空に向かつて撃つた。

この熾烈な対空砲火によつて、米軍機にも損害は出た。しかし、すでに本土決戦に備えて戦闘機隊が出撃することはなく、前回のように味方戦闘機が来てくれるることは無かつた。上空掩護も無く、動けない状況にある軍艦に米軍の攻撃を防ぐ手立てはもはやなかつたのだ。

米軍機は艦艇めがけて機銃、ロケット弾、爆弾を次々と撃ちこんでいた。そしてそれらが撃ちこまれるたびに艦艇からの対空砲火は弱まり、火災が発生し、艦体が傷つけられていった。

傷ついた艦艇は乗員がいなために浸水を防ぐ事も出来ず、次々と沈んでいった。幸いなことに瀬戸内海はかつて日本軍が攻撃した

真珠湾同様水深が浅いために、艦全てが水没するといつ事は無く、殆どの艦艇は大破着底するか、横転するかした。

レフした状態であれば、クレーン船などを用いさえすれば引き上げ復旧をせら事ができる。しかし、既に日本には引き上げるだけの労力も、艦艇を修理する資材も、そして時間の余裕もなかつた。

この空襲によつて在泊艦艇のことごとくが撃沈破された。そんな中で、日本最古参の空母である「鳳翔」と、哨戒艇102号は無傷であった。

だが、こうした残された艦艇の運命も間もなく決しようとしていた。

8月6日。その日も哨戒艇102号航海長の長野中尉は艦尾甲板で軍艦旗掲揚を行う朝礼を、他の主だつた乗員達とともに行つていた。

軍艦旗が掲揚されてしまはらくした8時15分、突然広島の方向が明るくなつた。そして数秒後にはズドーン……といつ凄まじい轟音が鳴り響いてきた。

「うおー！」

「なんだー！」

乗員たちは突然の事に驚いた。全員が音と光がした方向、広島のある方向に目を向けると、それまで快晴だつた青空に、不気味なキノコ雲が立ち上つていた。

「あれは広島の方角だぞ！…」

「空襲か！？事故か！？」

乗員達が口々に言い始めたのを、艦長の福井少佐が抑える。

「待て！憶測で物を言つものではないぞ！…とにかく全員別命あるまで通常どおりの仕事をしろ！…」「

この一言で、乗員達は冷静さを取り戻し、それぞれの持ち場へと戻つていった。

その後、夕方になつてポツポツと情報が入ってきた。

「広島が空襲されたらしい。」

「市内は壊滅したと聞いたぞ。」

「陸戦隊が救援のために出動した。」

情報の多くは憶測の範囲を出でていなかつたために、長野を含めて乗員の多くには何がおきているのか良くわからなかつた。わかることは、広島に何か起きたらしいということだけであった。

翌日、ようやく朝礼で福井艦長の口から真実が話された。

「諸君、鎮守府司令から連絡が入つた。昨日の朝広島市内に米軍の新型爆弾が投下され、広島は壊滅した。」

その言葉に、一人の士官が質問した。

「壊滅とはどういうことでしょうか？」

「文字通りの壊滅だ。情報に寄れば市中心部は火災と爆風で焼け野原となり、市内に展開していた陸軍部隊もそのほとんどが全滅したらしい。現在県から派遣された陸戦隊と宇品の陸軍船舶部隊が救援活動を行っているが、負傷者は数万規模であると思われ、もしかしたら我々も救援活動に参加するかも知れない。だから諸君らはその時に備えておいてくれ。」

福井少佐の話に、聞いていた乗員達は呆然としてしまった。

「新型爆弾とは何でしょつか？」

別の乗員が手を上げた。

「俺にもわからん。ただ聞いたところでは、たった一発で街が吹き飛んだらしい。」

朝礼はそこで終わつたが、乗員の同様は激しかつた。街を吹き飛ばせる爆弾をアメリカが持つたと言うことは、もはや日本にはどうしようもないということを全員がわかつていただだ。

「満？」

甲板をとぼとぼ歩いていた満に、スチュワートが声を掛けてきた。

「ああ、スチュワート。」

「艦長の言つていた話、本当かしりへ。」

彼女にも先ほどの話はやはり衝撃だったらしい。

「多分ね。艦長が嘘を言つ理由なんて全く無いんだからね。」

「・・・戦争、一体どうなるのかしりへ。」

彼女が言つにくやつて言つてきた。日本ではその質問はタブーだからである。例え答えられても、日本の勝利以外の答えを言えるはずがない。

だが、満にはそんな虚構の答えを言つだけの気力はもはやなかつた。

「戦争はもう終わりだ。本土決戦なんかもう出来ない。米軍が新型爆弾を10発本土に落とせばそれで終わりさ・・・いくら頭の固いお偉いさんでもそれくらいわかるはずだ。恐らく、日本はもうすぐ負ける。」

彼はそう断言した。

戦争の結末（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

終戦

戦局は日本にとって、もはや最悪としか言えないレベルにまで陥っていた。8月9日には広島に続いて長崎に2発目の原子爆弾が投下され、さらにアメリカのトルーマン大統領はさらなる投下を仄めかした。（実際17日に3発目の中島への投下が予定されていたとされる。）

そして、アメリカの原子爆弾投下に刺激されるかのように、日本が最後の和平交渉の頼みとしていたソ連が中立条約を破つて一方的に、満州、南樺太、千島方面への攻撃を開始した。

既に日本軍にその赤い津波をとどめる力などなく、それどころか守るべき一般市民をほつたらかしにして、自分たちが逃げるのが精一杯という体たらくであった。

ことここに至り、日本政府には最早ポツダム宣言の受託以外の道を選ぶことなど出来なかつた。

しかしながら、こうした現実にも関わらず、陸海軍は戦いを止める気など毛頭なく、結局ポツダム宣言の受託について政府の方針が一致しなかつたため、天皇に聖断を仰ぐことと成つた。

なおも最後の勝利を信じ、いや面子に拘つて本土決戦に持ち込もうとする陸海軍の強硬派の反対を退ける形で、昭和天皇は和平派の意見を受け入れてポツダム宣言の受託を決定した。

その後連合軍から送られてきた占領に関する方針を巡つてのドタバタや、降伏を良しとしない陸海軍の妨害があつたものの、ポツダ

ム宣言は正式に受託された。そして運命の昭和20年8月15日を迎えた。

「……時運の赴くとニ……耐えがたきを耐え……忍びがたき……忍び……」

呉に停泊する哨戒艇102号。その後部甲板の上には乗員が整列し、正午から始まつた天皇陛下直々の特別放送を拝聴していた。

電波状況が悪いのか、ラジオの性能が悪いのか、放送は途切れ途切れにしか聞こえてこない。だが、例え良く聞き取れなくても、乗員たちは放送の意味を良くわかつっていた。これは日本が戦争に負けたことを報せる放送なのだと。

兵士の1人が泣き崩れた。それに釣られる形で、他にも数人の兵士が泣き崩れた。

あの昭和16年12月8日の真珠湾奇襲から3年8ヶ月。ついに戦争が終わつたのだ。日本の負けという形で。多くの人命を犠牲にしながら、多くのものを失いながら、多くの苦労に堪えながら戦つたのにである。

昨日までは勇ましく本土決戦へ向けての準備と心構えをしていました。かかわらず、たつた数分の放送によって、それも全て壊されました。

兵士にとつて、この放送はこれまでの全てを無に帰してしまつた。等しかつた。

一方で、戦争が終わり危険な日々から解放されるという意味で、安堵の息をついた人間が多くつたのも事実である。特にこれまで貧しい生活を強いられ、堪えに堪えてきた国民たちがそうであつた。また、兵士の中にも同じような感想を抱く人間もいた。

放送終了後、難読の玉音放送に代わつて、通常のNHKのアナウンサーが日本の降伏を通常の言葉で語つた。

それが終わると、艇長の福井少佐が全乗員の前に立つた。

「諸君！ ただ今陛下の言葉にあつたように、大日本帝国政府はポツダム宣言を受託し降伏した。日本はこの戦争に敗れたのである！！」

強い夏の日差しが照りつける中、福井は一端言葉を切つた。そして再び話し始めた。

「しかしながら、あくまで宣言を受託したのみであり、正式な講和はこれからである。今後連合軍が進駐してくるにしても、しないにしても、我々は腐つても帝国海軍軍人である。だから、上からの命令にしつかり従い、軽挙妄動を慎まねばならない。諸君らが最後まで任務を全うすることを期待する！！・・・話は以上、全員解散！
！通常の配置へと戻れ！！」

解散命令が出され、整列していた将兵たちは各自の持ち場へと戻つていった。満もいつもの配置である艦橋へと戻つた。

「戦争が終わったか・・・長かった。本当に長かった。」

艦橋から海を見つめながら、彼は一人呟いた。現在艦橋には彼しかいない。艦長や幹部たちは鎮守府に行ってしまったし、艇は停泊しているから他の兵士たちもいない。

彼の心中には比較的穏やかだった。既に日本の敗戦を予見していた分、今日の降伏という事態は、来るべきものが来たかという想いであつた。

これから一体どうなるか分からぬ。恐らく日本軍は解体されるだろう、そうなれば生糸の海軍士官である彼は失業することとなる。また、進駐してくる連合軍が自分たちに一体どのよつなことを要求するのかもわからない。

しかしながら、それらはいずれもまだ先の事である。満にとつては、今戦争が終わつたことの方が重要だつた。

「これでもう戦う必要もなくなつたんだ。これでもう死ぬこともなくなつたんだ。」

機能までは常に死を意識してきたが、その必要もなくなつた。どこか空虚感が残るが、彼は素直にそれを喜んでいた。

そしてその日の夜、彼はいつもどおり甲板上を歩いていた。艇の上から陸の方を見ると、ポツポツと民家の明かりが見える。昨日までは灯火管制のために真つ暗であつたが、すでにその必要もなくなつたために、久しぶりに思う存分点けているのだろう。

そんな事を考えながら、彼は煙突の下に、顔を俯かせて座る金髪でワンピース姿の少女を見つけた。彼はその少女に声を掛ける。

「スチュワート！」

「ああ、満。」

声に反応して、少女、この艇の魂であるスチュワートは俯いた顔を上げて言った。満は彼女の隣に座った。

「戦争終わったな。」

「ええ。・・・満は悔しくないの？ 戦争に負けたこと。」

彼女は不思議そうな顔をして言った。

「確かに悔しい気もしない」とはない。けど、これでもう人が死ぬことがなくなった分、気が楽だよ。」

「そう。」

「それに・・・」

満は口ごもつた。その顔は心なしか赤い。そんな彼の顔をスチュワートが覗き込んだ。

「それに？ 何？」

「・・・お前が死ぬ姿を見なくて良くなつたからな。そして俺自身も死ぬ覚悟を決める必要もないから、心の底から好きな人に想いを伝えられる。」

その言葉に、スチュワートが驚く。そして彼女も顔を赤くした。

「えー？ それって・・・」

彼女の驚きを他所に、彼はポケットから何かを取り出した。そしてスチュワートに差し出す。

「新品じゃないけど、我慢してくれな。これを手に入れるのだけは苦労したんだから。」

スチュワートはその箱を受け取る。

「開けてみなよ。」

満の言葉に従つて、彼女は箱を開けた。箱の中には、古びてはいたが、指輪が一つ入つていた。

「これっ・・・」

彼女は言い切れなかつた。何故なら満が彼女を抱きしめていたからである。彼は強く彼女を抱きしめると、一言いつ呟ついた。

「お前が好きだ。この世で一番。」

「・・・」

それからしばらく沈黙が続いた。スチュワートはいきなりのことを驚き、何も言えなかつたのだ。

じばらぐして、彼女はようやく言葉を紡いだ。その目に涙を浮か

べながら。

「あなたはバカよ。オオバカ者よ。」

約束

満に抱かれながら、スチュワートは泣き始めた。

「どうして…? どうして私なんか…」

「素直にお前が好きだから。それ以下でもそれ以上でもない。」

「あなたわかつていいの? 私は艦魂なのよ。人間じゃないのよ。それに、戦争に負けたということは…」

彼女はそこから先が言えなかつたが、それについては満によくわかつっていた。

敗戦国の軍艦が迎える運命は悲惨だ。敵国に接収される。例え接収されなくとも、良くて解体。もしくは標的として処分される。

スチュワートこと哨戒艇102号は元はアメリカの駆逐艦だが、既に相当の旧式艦である。例え返還されても彼女が生き延びられる可能性など無いに等しい。つまり彼女は恐らく近いうちに死を迎えることとなるだろう。

ただでさえ、人ではない艦魂に恋することは出来ない。それなのに、彼は死を間近に控えた彼女に、恋をして指輪を送つたのである。スチュワートからすればマトモではない。

しかし満は笑顔で言った。

「わかつてゐるよ。よくわかつてゐる。」

「ならどうして！？」

「俺は、お前に会った時からお前が好きだった。例え艦魂でも、俺にはお前以外見えなかつたんだ。けど、明日をもわからない身だから、言うのを躊躇つていた。けど、戦争は終わつたから。・・・そしてお前と別れる前にこの気持ちを伝えたかつた。」

満は言い終えると、抱くのを止めて、彼女を見据えた。

一方のスチュワートは泣いてくしゃくしゃにした顔を真っ赤にして言った。

「あなたは本当にバカよ。」

「バカでも良い。お前にこの気持ちを伝えたかつた。スチュワート、愛している。」

「・・・・ありがとう。本当にありがとう。私も、あなたが好きです。」

彼女は感極まつて言つと、彼に再び抱きついた。そしてキスをした。

数分後、2人は先ほどと同じように座つていたが、スチュワートは満にしなだれかかる格好になつっていた。

しかし、心が繋がつた2人であつたが、2人に残された時間は少なかつた。

「なあスチュワート。」

「何?」

「前艦魂は人に生まれ変わることがあるって言つてたよな。」

「うん。」

「俺の国にも転生輪廻って考え方があるんだ。人は死んでも、いつかまた生まれ変わるっていうね。」

スチュワートは満がどうしてそんなことを話し始めたのか、最初は理解できなかつた。

「それで?」

「だからさ、スチュワート。約束しないか。いつか俺たちが、平和な時代に生まれ変わつて、出会うことがあるなら・・・その、今度こそ一緒にならうつて。今は少ない時間しか残つていなけれど。今度出合う時は・・・必ず。」

スチュワートの顔は再び真っ赤になつた。

「だめかな?」

「・・・・ふ。良いわ。約束よ。」

「ありがとう。」

そして2人は再びキスをした。

それから2ヶ月間、2人は残り少ない一緒にいられる時間を楽しんだ。そして、哨戒艇102号は日本海軍から除籍され、米軍に引き渡された。

「さよならスチュワート！ 約束忘れるなよ！」

退船の日、離れるランチの上から満は手を振つて叫んでいた。それに対して、スチュワートもマストの頂上に立つて、彼に向かつて手を振つて叫んだ。

「うん、絶対に忘れない！ さよなら満！ 今度は平和な時代で会いましょう！」

哨戒艇102号から再び米駆逐艦「スチュワート」となった彼女は、その後本国へ戻るべく太平洋を横断した。しかしながら、途中で機関トラブルを頻発し、実に半年もの時間を掛けた。まるで、日本から離れるのを嫌がるかのように。

祖国へ戻った彼女であったが、予想通り既に彼女に居場所はなかった。最初は帰還を果たした彼女を新聞は大々的に報じるなどしたが、米国海軍が彼女に下した結論は、航空機の標的としての撃沈処分だった。

昭和21年5月、サンフランシスコ沖に引っ張り出された彼女に向けて、陸上基地から発進したF6FとF4Uが爆弾とロケット弾を浴びせた。既に乗員のいない彼女は徐々に浸水していき、しづらしくして横倒しになり転覆し、太平洋の底へと消えていった。

その直前、彼女の魂も最後を迎えていた。

「さよなら満。私を本当に愛してくれた人・・・約束・・・忘れな
いから。」

それが彼女の最後の記憶だった。彼女は誰にも見取られることなく、多くの仲間たちの後を追つた。

一方、少し遅れる形で彼女を愛した男性、満も不幸な最後を迎えていた。彼はその後海軍の後を引き継い海上保安庁の掃海部隊へと配属替えとなり、米軍が戦争末期に投下した機雷の後片付けをしていた。

だが、その最中に乗っていた艇のすぐ傍で機雷が爆発した。

木造の掃海艇には致命的な爆発だった。瞬時に艇は傾いた。そして、彼は飛び散った破片によつて大怪我をし、脱出することは適わなかつた。

そんな彼の頭に最後に浮かんだのは、愛した女性の顔だった。

「スチュワート・・・約束だからな。」

次の瞬間、彼の体は海の底へと引きずりこまれた。そして彼の意識もそこで飛んだ。

「おい、起きろよ允。」

友人に起こされ、永野允は現実に意識を戻した。

「あ、ごめん。」

とある大学のキャンパス。昼の授業前に教室に入った彼は、うとうとしてそのまま居眠りをしてしまった。そして夢を見ていた。最近になってこの夢ばかりを見ていた。自分そつくりの男が、軍艦に乗り込んでいる風景。そして、その船から離れるときに手を振る少女の姿。

夢にしてはあまりにも鮮明なその姿に、彼は何か記憶に引っ掛かる物を感じていた。

「なんだ、また例の少女の夢を見ていたのか？」

友人がちやかすように言った。

「ああ。」

「お前艦魂の伝説を調べて本ばっかり読んでるから、頭の螺子が緩んだんじゃないかな？」

「かもな。で、何か用か？授業はまだ始まつていないみたいだけど。

」

時計を見ると、まだ10分ほど余裕がある。

「おお、一コースだぞ。今日から内のゼミに編入生が来るらしいぜ。

」

「へえ、珍しいこともあるもんだな。」

「ああ。しかも、金髪の美少女だぞ。」

友人が楽しそうに言っていたとき、部屋の扉が開いた。ちょうど允から見て後ろの扉だった。

「おお、噂をすれば。」

どうやらその少女が来たらしく、允は体を後ろに向けた。そして、絶句した。

「...」

「...」

2人はお互いに見合つたまま、驚く。そしてその瞬間、まるでフルッシュバックしたかのように、2人の脳裏にあの記憶が甦ってきた。

允は立ち上がりつて、彼女と向かい合つた。

「どうした？」

友人が怪訝な表情をしたが、もはやそんなこと気にならなかつた。

2人はお互いに顔を見合つた。そして少女の方が先に口を開いた。

「やつと・・・会えた。」

「ああ。」

「約束・・・覚えてる?」

「・・・もちろんだとも。」

その言葉とともに、少女は面々の笑顔を浮かべた。その姿はかつてのままだつた。

「えー?えー?」

状況を理解できない友人を差し置いて、允は続ける。

「君の今の名前は。」

「瞳。スチュワート・山本・瞳。あなたは?」

「允。永野允。」

そして2人は一拍の間を置いて言つ。

「よろしくね、允。」

「よろしくな瞳。約束を守つてくれてありがとう。」

2人は再びめぐりあつ」とが出来た。時代を越えて。平和な時代

に。

約束（後書き）

終わりです。中途半端かもしませんが終わりです。
御意見・御感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3967d/>

俺の彼女は駆逐艦

2010年10月21日18時19分発行